

わが心の山 富士を語る その2  
富士を眺める

富士山が世界文化遺産になれそうだと見えた途端にマスコミは騒ぎたて、風に踊る民は騒ぎ出す。朝日新聞の投書欄に面白い投書が載っていた。「富士山の山小屋は大変貧弱なもので、これから外国人の観光客を数多く迎え入れるにあたって見つともない。宿として十分な機能と装備を目指して改善すべし」というような主旨で縷々述べられていた。バス・トイレ完備のホテル並みの山小屋を作るのは良いが、そこから出る廃棄物と排泄物をどうするつもりなのか？これが今まででも一番の問題であったが、さらに大問題化するであろう。

高い山は、不便で難しくて誰でもが行く訳にはいかないようになっていて安全や美観が保たれているということも言える。この夏は富士登山の事故が数多く発生するような気がする。

また一方では、あの地震とこの地震とが同時に発生したらどうなるだろうかと学者や評論家のような方々が喧々諤々議論だけを繰り返している。もし本当たししたら・・・この議論から出て来る示唆との関係はどうなるのだろうか？ などなど、世界遺産というひとつの具体例を通して、富士山の今後のあり方やあるべき姿が問われることになった。

さて、そのような議論はさておいて、「わが心の山 富士を語る その2」では「眺め」という観点から書いて見ることにした。

### <1> 太宰治かく語りき

「富士の頂角、広重の富士は 85 度、文晁の富士は 84 度くらい、けれども、陸軍の実測図によって東西及び南北に断面図を作ると、東西縦断は頂角 124 度となり南北は 117 度である。」

太宰治の「富嶽百景」はこう書き出して、さらに続く。

「広重、文晁に限らずたいていの絵の富士は、鋭角である。いただきが、細く、高く華奢である。北斎にいたっては、その頂角ほとんど 30 度くらい、エッフェル鉄塔のような富士をさえ描いている。けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろくさと拡がり、東西、124 度、南北は 117 度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない。たとえば私が、印度かどこかの国から、突然、驚にさらわれ、すつんと日本の沼津あたりの海岸に落とされて、ふと、この山を見つけても、そんなに驚嘆はしないだろう。ニッポンのフジヤマを、あらかじめ憧れているからこそ、ワンダフルなのであって、そうでなくて、そのような俗な宣伝を、一切知らず、素朴な純粹の、うつろな心に、果たして、どれだけ訴え得るか、そのことになる、多少、心細い山である。低い。裾の拡がっている割に、低い。あれくらいの裾を持っている山ならば、少なくとも、もう 1.5 倍、高くなければいけない。」

そして、各地から見た富士や、色々な環境下で体験した富士のことを書き連ね、昭和 13 年の秋に旅に出たときの記述が始まる。御坂峠に登り、天下茶屋に滞在している井伏鱒二を尋ね、しばらく滞在する。その間のことが記されており、折々の情景に富士が描かれている。

霧に包まれたパノラマ台に登った時の記述に、こんな一文もある。

「何も見えない。井伏氏は、濃い霧の底、岩に腰をおろし、ゆっくり煙草を吸いながら放屁なされた。」

「斜陽」「人間失格」などに見られる神経質そうで危なげな太宰治のイメージとはまったく異なる、データを交えた科学的な文章や、洒脱さを随所に匂わせた文章は意外性もあって面白い。

富士山のことについて書いた読み物といえば、何はさておいても「太宰治の富嶽百景」である。

### <2> どこから見るとどう見える？

独立峰でしかも円錐形をしている富士山は、どこから見ても同じように秀麗に見えると思っている人は少なくない。そこに太宰治が突っ込みを入れた。では実際にはどの位違うのだろうか、周囲のいくつかの方角か

ら見た富士山を比較して見る。

眺める方角による違いを楽しむ主要なポイントは、「頂角」「山頂の形状」「裾野の広がり方」「裾野に見えるアクセント」そして季節折々・時々刻々変わる色や模様であろう。

「頂角」についてのコメントは太宰に譲るとして、「山頂の形状」について触れて見る。

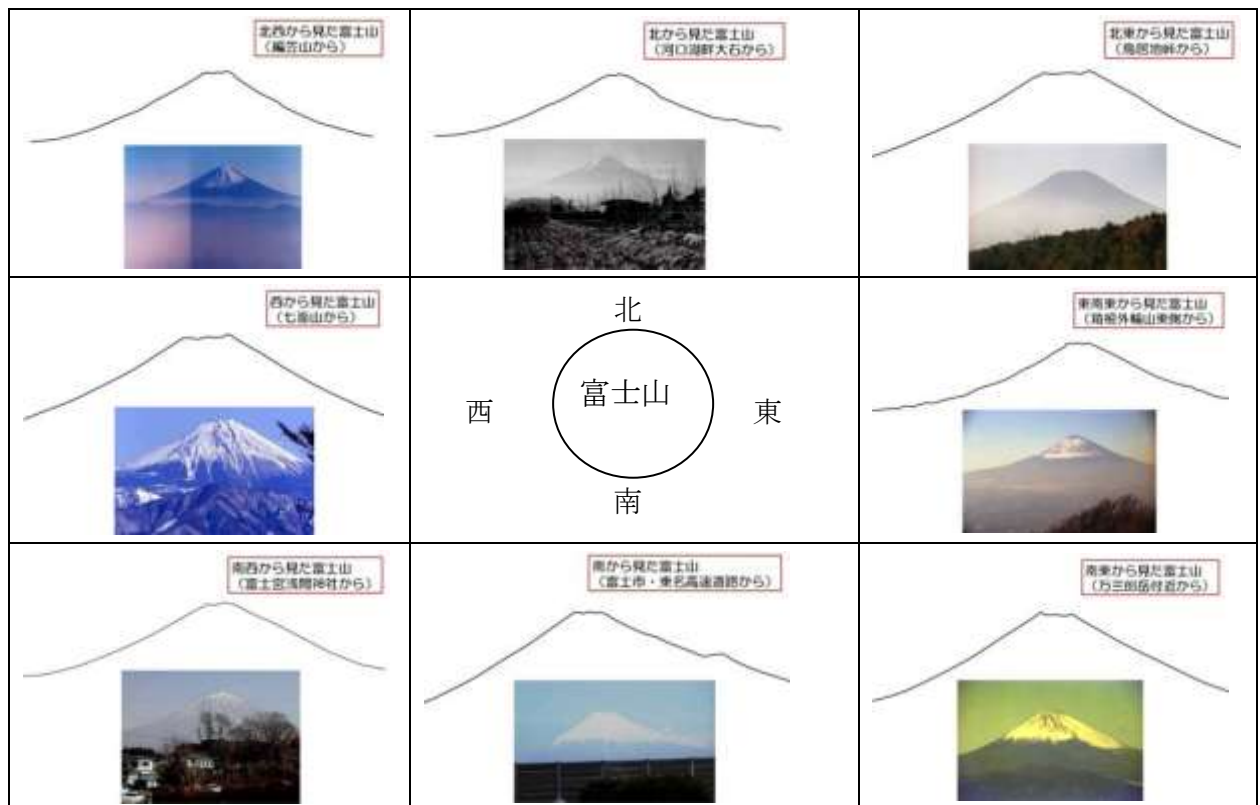
「わが心の山 富士を語る その1」でも述べたように、山頂のお鉢の稜線上には様々なピークがある。その中のひとつが山頂と呼ばれる最高点「剣ヶ峰 (3776m)」で、このお鉢のピークがどう見えるかによって富士全体の眺めが変わって来るし、さらに平地から見上げた場合と近隣の山の上から見た場合とでも大きく異なりが出て来る。

静岡県側から見ると、剣ヶ峰が間近に見える関係で「山頂の左側の突起」が思いがけない大きさに見える。このため山頂部が右肩下がりに傾いて見えるのが特徴だが、これをもって美しいという人と美しくないという人がいるのは仕方がない。

北または北東からの眺めだと、吉田大沢が柔和な線で山肌に刻みを入れているが、西側からの眺めになると大沢崩れがえぐり取った残酷な傷が目立ち、荒々しい山に見える。ところが、東または南東に回ると、宝永火口が富士の山肌に大きく口を開けて見える。

さらに、麓に連なる愛鷹連峰や大小の火山突起達の存在も加わり様々な形に変わって来る。南面の富士は右に宝永山と愛鷹山を眷族のように従えて厳めしく見える。山梨県側の山麓には火山としての歴史を物語るお椀を伏せたような小さな突起が沢山あるので、上部は柔らかな曲線を描いているが麓に瘤のようなものがいくつも見える。

いくつもの角度からいくつもの富士を眺めて、自分のお気に入りの富士を見つけるのも楽しみ方のひとつかもしれない。(下表：方角による富士八景)



### <3> 車窓の富士を楽しむ

天気の良い日に東海道新幹線に乗ると、三島を過ぎてしばらくで車窓にどよめきが滲みだす。富士川の鉄橋を渡るとそれが治まる。時速 300Km 近いスピードなので、それは僅かな時間でしかない。

車窓の景色を楽しむのなら、やはり在来線の各駅停車に乗る方が良い。

東海道線は東西に走るのので、車窓からの富士は山側の窓になるが、列車の進行方向が忙しく変化する路線か

らだと、右に見えたり左に見えたりのスリルが加わり楽しみも倍増する。

中央本線が笹子トンネルを抜けて甲府盆地の東端に顔を出すと、北に走り塩山に着く。塩山を出て僅かの間だけ西に進むが、進路を南西にとって石和温泉に向かう。石和温泉から西に進み、西北西に向きを変えると甲府駅に入る。甲府から竜王まではほぼ西向きに走り、釜無川の土手にぶつかりと北西に向かって川沿いに走るようになる。この後上諏訪までは北西に走り続けるが、山の端を舐めたり潜ったりしながら小さな起伏を避けて、徐々に狭くなる谷を登って行く列車は小刻みにカーブを繰り返す。最高点の信濃境までの車窓の眺めは富士山ばかりか、八ヶ岳や南アルプス等も加わってスリル満点である。

御殿場線の車窓から見る富士山も楽しい。国府津駅を出た列車は箱根の山を避けるように北西に向かってゆっくり登って行く。山北を過ぎてしばらく走ると富士が姿を見せ始め、駿河小山で全景が現れる。足柄駅では「駅前に富士山があるぞ」という光景になる。この後、高度を下げながら南下して沼津に向かうにつれて愛鷹山が左から迫ってきて徐々に前に立ち上がるようになる。そして終点の沼津では、3776mの日本一の山は、1500mほどの愛鷹山の上に申訳なように顔を出しているだけになってしまう。

(右図：御殿場線の車窓から変化する富士山を楽しむ)

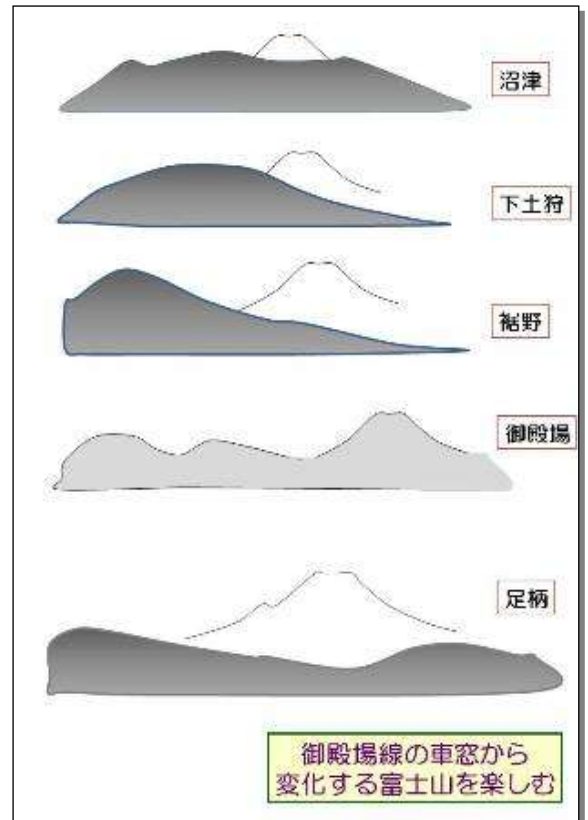
身延線も富士山を眺める列車として楽しむことができる。まさに目の前に聳え立つ富士を見上げながら富士駅を発車する。

西に向かって東海道線に沿って走る身延線は程なくして北に向きを変えて柚木駅に入る。ここから次の堅堀までは富士山に向かって走るコースをとる。潤井川を渡ると北北西に向きを変えて入山瀬、そして小さなカーブをいくつかしながら富士宮駅に入る。富士宮駅を出た身延線はしばらくすると左に大きく旋回して南向きに走って沼久保、そして富士川にぶつかりと、河の蛇行に合わせるように北西・南西・北西と忙しく向きを変えながら芝川に向かう。そして北北西に向かって川沿いに登るようになる。ここまでの間の富士山は慌ただしい動きで、車内のあらゆる窓に登場する。

東海道線の吉原から出ている岳南鉄道も面白い。マッチ箱のようなローカル線の電車が、途中下車したくなるような景色をたっぷりと提供してくれる。

走る列車の窓から見る景色は、窓枠という額縁の力を借りると思いがけない芸術作品になってしまう。また列車の動きによって現れては去っていく景色には、動画を見ているような面白さがある。

だから車窓の旅は止められない。



以上